

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02271

研究課題名(和文) 東アジア翻訳語ネットワークと近代史学史に関する思想史的研究

研究課題名(英文) Thought historic study on East Asia term specially for translation network and history of modern historical study

研究代表者

桂島 宣弘 (KATSURAJIMA, Nobuhiro)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：10161093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：東アジア史学思想研究会をほぼ月一回程度、三年にわたり開催した。この間、韓国ソウル大学校、同高麗大学校、同延世大学校、台湾中国文化大学、中国広東外語外貿大学、同廈門大学などから研究者を招聘した国際研究会を開催し、また韓国東北亜歴史財団、同漢陽大学校、同翰林大学校、同忠北大学校などから研究者を招聘して国際シンポジウムを開催した。この他、韓国全州大学校古典籍研究所、漢陽大学校の研究会などとは定期的な情報交換、共同研究を実施した。以上の成果は、『東アジアの思想と文化』9～10号、拙著『思想史で読む史学概論』、編著『東アジア 遭遇する知と日本』、拙著中国語版などとして公刊された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで個別に行われてきた日中韓台湾の近代史学思想史について、初めて包括的・共時的に取り扱った研究としての意義を有している。近代以降の東アジアの帝国・植民地構造の中で、西洋学術知としての近代歴史学が、一つの翻訳語ネットワークを形成しつつ、漸次影響を広げ現在に至っている過程を、ほぼ明確にすることができたが、同時に日中韓台湾の史学思想史研究者の恒常的ネットワークが構築されたことも、今後の歴史認識問題などに鑑みて大きな社会的意義を有している。なお、東アジア共有知としての儒学系歴史学からの変容過程の解明については課題を残しているが、今後は古典籍のネットワーク研究として継続されていくこととなる。

研究成果の概要(英文)：I held around one time a month of history of East Asia historical study thought workshop for three years. I held the international workshop which invited a researcher the other day from Korean Seoul National University, Korea University, Yonsei University, Taiwanese Chinese Culture University, Guangdong University of Foreign Studies, Xiamen University and I invited a researcher again from Korea Tohoku sub-history foundation, Hanyang University, Hallym University, Chungbuk National University and held an international symposium. In addition, I carried out periodical information exchange, collaborative investigation with Korean Jeonju University classic family register research institute, the workshop of Hanyang University. As for the above-mentioned result, it was published compilation "East Asia intellect and Japan which met" as my book Chinese editions "thought of the East Asia and culture" 9-10, my book "historical study outline to read in history of thought".

研究分野：日本思想史

キーワード：史学思想史 翻訳語ネットワーク 東アジア トランスナショナル・ヒストリー 儒学・朱子学 帝国・植民地

1. 研究開始当初の背景

(1)平成 28 年度まで、研究代表者は科学研究費補助金もえて、18～19 世紀の東アジア思想空間における学術用語（日本漢語）＝翻訳語の生成と自他認識の変容、東アジアにおけるナショナルヒストリーの形成を解明する研究に従事してきた。それらの成果は、「『近世帝国』の解体と十九世紀前半期の思想動向」（『日本思想史講座』3、ペリカン社、平成 24 年）、「日本思想史学の『作法』とその臨界」（岩波講座『日本の思想』1、平成 25 年）などとして公刊・公表してきた。幸いなことにこれらの論考は、韓国・中国でも注目され、拙著『東アジア自他認識の思想史』（ソウル論衡、平成 21 年）拙稿「跨國界的歴史與東亞」（『台湾東亞文明研究學刊』第 9 刊第 1 期、平成 24 年、『南開日本研究』2012、平成 25 年）、「Japanese Nationalism and East Asia」（"Journal of Cultural Interaction in East Asia"5、平成 26 年）、「東亞文明圏中的日本思想、日本儒学」（『深圳大学学报』人民社会科学版 33-2、平成 28 年）など、韓国語・中国語・英語にも翻訳され、この結果、日本のみならずソウル大学校・高麗大学校・北京大学・南開大学・台湾大学などの研究者と日常的に議論、意見交換を行うネットワークを構築することができた。また、韓国の高麗大学校図書館、中国の北京大学図書館などで当該テーマに関わる史料収集に努め、そのデータ集積と紹介を行ってきた。これらの研究を通じて、18 世紀以降の中国（清）思想の展開とそれとの日韓のネットワークの構造、西洋思想とその翻訳の様相、近代以降における日本学術知の影響関係、近代人文科学としての近代歴史学（日本思想史学）の日本における成立と、それが東アジアに及ぼす作用・影響について、かなりの程度明らかにすることができた。

(2)だが、この研究過程において、東アジアの史学思想について、翻訳語を軸とするネットワークを思想的に解明する必要性を痛感するようになった。ことに韓国や中国（台湾）における歴史叙述について、戦前期の帝国日本を発出源とする近代学術知がどのような影響を与えてきたのか、また帝国日本に対する抵抗や葛藤が戦後のそれにどのような刻印を残しているのかについては、現在に至るまでほとんど思想的に検討されていないといわなければならない。この問題を検討することは、戦後に至る学術知の継承の問題、すなわちポストコロニアル問題を考えるためにも、重要なことであるといわなければならない。本研究は、こうした事情に鑑み、東アジアのナショナルヒストリーの成立・展開とその史学思想について、研究代表者がこれまで行ってきた研究を土台に実証的に解明し、最終的には東アジア史学思想史という新しいジャンルを切り開こうとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、上記の背景の下、東アジアとりわけ日中韓（台湾）における近代史学史について、東アジアの史学思想史関係研究者間の恒常的ネットワークを構築し、相互の意見交換・共同研究に基づいて思想的に解明しようとするものである。具体的には明治日本におけるナショナルヒストリーの形成が、植民地朝鮮と中国・台湾（「満州」など）において、どのような作用・影響を与えたのかを実証的に解明し、その上で現在に至る日本史学（日本思想史学）と朝鮮史学・中国(台湾)史学などに横たわる認識枠の共通性と差異について、ポストコロニアル問題と結びつけつつ分析することが研究目的となる。この意味では、未だほとんど進んでいない日中韓（台湾）を横断した史学史の思想史的研究を研究者ネットワークに基づいてから行おうとするものである。

3. 研究の方法

(1)この研究のために用いられる方法は、日本思想史学の方法である。すなわち、文献史料に基づいて歴史認識・他者認識を克明に分析していく方法である。したがって、文献収集が研究の中心となることはいうまでもない。ただし、ネットワークや学術知の連鎖を重視する本研究では、学術制度・人脈・知識人の行動に関わる史料を収集することが不可欠であり、そのためには東アジアにおける現在の研究者間ネットワークを用い、それをさらに拡大しての情報交換・意見交換・研究会と国際シンポジウムの開催がより重要となってくる。研究内容としては、文献を中心とした史料収集、日韓中(台湾)の研究者による研究会・シンポジウムの開催、情報発信としてのホームページの構築

と収集史料の公表、学術雑誌の刊行、拙著の日韓中(台湾)での同時刊行が目指されていくこととなる。

(2)当該テーマに関わっては、韓国思想史研究においては、韓国史学思想のみを取り扱った個別の成果(全州大学など)や植民地朝鮮における『朝鮮史』編纂過程を分析した研究(河宇鳳氏・金性珉氏など)、近代日本の諸学のパイオニアたちが植民地朝鮮に及ぼした影響の研究(尹海東氏など)が、中国における西洋思想の受容過程を取り扱った研究(厦門大学など)が存在する。とはいえ、思想史的方法を用いての日中韓(台湾)を横断しての研究は、未だ圧倒的に立ち遅れている。こうしたことに鑑みて、本研究は、この間急速に成果を挙げている韓国における植民地時代の思想史研究の成果を土台として、日中韓(台湾)の比較思想史研究・韓国日本思想史研究、とりわけ漢陽大学「植民地主義歴史学と帝国」研究会、全州大学校古典籍研究所、高麗大学校グローバル日本研究院とも連携しながら、そのネットワークをより一層充実させながら、日韓の国際学術研究の中に史学思想史を位置づけていくものとなる。

4. 研究成果

日中韓(台湾)における史学思想史研究に関わる研究者間ネットワークの形成、恒常的な学術情報交換のために一部に科研費も用いて以下のように東アジア思想文化研究会例会及び四度の国際シンポジウムが開催された。

- (1)2017年6月9日/盧官汎(韓国ソウル大学校)
- (2)6月17日/権赫泰(韓国聖公会大学校)廣瀬陽一(大阪府立大学)原佑介(立命館大学)
- (3)7月1日/戸邊秀明(東京経済大学)
- (4)10月7日/徐興慶(台湾中国文化大学)許怡齡(台湾中国文化大学)
- (5)10月20日/張憲生(中国広東外語外貿大学)
- (6)11月3日/肖琨(中国キ南大学)
- (7)2018年1月27日~28日/(国際学術シンポジウム)桂島宣弘(立命館大学)呉炳守(韓国東北亜歴史財団)尹海東(韓国漢陽大学校)田中聡(立命館大学)張信(韓国教員大学校)鄭駿永(韓国ソウル大学校)鄭尚雨(韓国翰林大学校)辛珠柏(韓国延世大学校)沈熙燦(立命館大学)李廷斌(韓国忠北大学校)戸邊秀明(東京経済大学)
- (8)5月11日/許智香(東京大学)
- (9)5月25日/沈熙燦(立命館大学)
- (10)6月8日/富山仁貴(関西学院大学)
- (11)6月29日/裴貴得(立命館大学)朴海仙(立命館大学)
- (12)7月6日/長志珠絵(神戸大学)佐藤太久磨(韓国漢陽大学校)
- (13)7月14日/青柳周一(滋賀大学)松本智也(立命館大学)
- (14)8月4日/向静静(立命館大学)松川雅信(立命館大学)
- (15)10月26日/劉岳兵(中国南開大学)余新忠(中国南開大学)
- (16)10月27日/(国際シンポジウム)姜制勲(韓国高麗大学校)李亨大(韓国高麗大学校)殷暎星(立命館大学)許智香(立命館大学)邊明燮(韓国高麗大学校)徐珉珠(韓国高麗大学校)松本智也(立命館大学)石運(立命館大学)丁娟朱(韓国高麗大学校)洪滄恵(韓国高麗大学校)李炫姫(韓国高麗大学校)崔有晶(韓国高麗大学校)石原和(立命館大学)梁正賢(韓国高麗大学校)蔡洙珉(韓国高麗大学校)沈ボラム(韓国高麗大学校)古文英(立命館大学)朴海仙(立命館大学)朴正宰(韓国高麗大学校)
- (17)2019年1月9日/(国際シンポジウム)張舜順(韓国全州大学校)殷暎星(立命館大学)黄泰黙(韓国全州大学校)松本智也(立命館大学)文璿得(韓国全州大学校)古文英(立命館大学)金貞和(韓国全州大学校)
- (18)5月10日/朴海仙(立命館大学)黄薇サン(立命館大学)
- (19)6月7日/キム・ナシヨン(韓国東西大学校)張夢鶴(中国広東外語外貿大学)

(20)6月21日 / 古文英(立命館大学)石運(立命館大学)

(21)7月19日 / 向静静(立命館大学)松本智也(立命館大学)

(22)7月28日 / 楊洪俊(中国南京工業大学)

(23)8月8日 / (国際シンポジウム)桂島宣弘(立命館大学)朱人求(中国廈門大学)郭曉東(中国復旦大学)松川雅信(日本学術振興会特別研究員)趙金剛(中国社会科学院)黃薇サン(立命館大学)吳光輝(中国廈門大学)古文英(立命館大学)向静静(立命館大学)和溪(中国廈門大学)朱学博(中国重慶大学)石運(立命館大学)

(24)10月26日 / 安裕林(韓国梨花女子大学校)洪伊杓(京都大学)金泰勲(四国学院大学)

(25)12月20日 / (金)石運(立命館大学)向静静(立命館大学)

(26)2020年1月15日 / 沈熙燦(韓国延世大学校)金東僖(韓国高麗大学校)

これらの研究における具体的成果については『東アジアの思想と文化』9~10号(2018年3月、2019年3月)、同11号(2020年6月刊行予定)として公刊し、また最終的には桂島宣弘編『東アジア 遭遇する知と日本』(文理閣、2019年)として取りまとめられた。さらに、『季刊日本思想史』(ペリカン社)の特集号としても刊行されることになっている(編集済)。これらによって、ナショナルヒストリーの寄せ集めではないという意味での東アジア史的地平から史学思想を捉える視点について、国際共同研究として示すことができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 桂島宣弘	4. 巻 292号
2. 論文標題 書評 尹海東『植民地がつくった近代』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『新しい歴史学のために』	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 0912-3296	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂島宣弘	4. 巻 34
2. 論文標題 天皇制の過去と現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本思想史研究会会報	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 7件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 近代天皇制の思想過程
3. 学会等名 韓国東西大学校日本学研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 会沢安に見る19世紀前半期日本朱子学の様態
3. 学会等名 「儒学と東アジア世界」国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 「近世帝国」周辺部徳川日本の儒学・朱子学の動向
3. 学会等名 日本朱子学的伝承与創新學術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 トランスナショナル・ヒストリーという視角
3. 学会等名 韓国全州大学校特別講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 日本天皇制の過去と現在
3. 学会等名 韓国高麗大学校BK21講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 「近世帝国」解体期の徳川思想
3. 学会等名 中国キ南大学2017學術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 桂島宣弘
2. 発表標題 天皇制の過去と現在
3. 学会等名 韓国忠北大学校特別講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 桂島宣弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中国社会科学出版社（北京・中国）	5. 総ページ数 214
3. 書名 徳川から明治に至る自他認識の思想史	

1. 著者名 桂島宣弘編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 374
3. 書名 東アジア 遭遇する知と日本	

1. 著者名 桂島宣弘・金津日出美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 多楽園（ソウル・韓国）	5. 総ページ数 282
3. 書名 写真とともに見る日本事情（改訂版）	

1. 著者名 桂島宣弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 286
3. 書名 思想史で読む史学概論	

1. 著者名 桂島宣弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大陽出版	5. 総ページ数 342
3. 書名 歴史を通して「他者」と向き合う	

1. 著者名 桂島宣弘・金津日出美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 160
3. 書名 改訂版留学生のための日本事情入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>桂島宣弘のホームページ http://www.ritsumeai.ac.jp/~katsura/index_jp.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----